

地小出版  
方小版

情報誌

# アクセス

毎月1回	1日発行
購読料	定価 150円 (本体 143円)
	年間 1,500円 (税込み)
振替	00120-0-19017

発行所 (株)地方・小出版流通センター  
編集 アクセス編集委員会

〒162-0836 東京都新宿区南町20  
TEL.03-3260-0355 FAX.03-3235-6182

## 後ろめたさとともに、それでも本を作る 広がりを持って受け止められている『女川 佐々木写真館』

文・和田悌二 (一葉社 代表)

一葉社を設立して昨年の11月で四半世紀が過ぎた。

実は、わたしにはもはや習性のようなものとなってしまったある種の後ろめたさがある。それが、この25年間、ずっとつきまとっている。

何に対してかと言えば、これが出版に対しての後ろめたさである。しかも、かなり深刻なものである。人を実際に殺している、という後ろめたさだからだ。それは、「一葉社」という名前の由来にも表れている。

25年前、本は紙でできていた。紙の原料は木である。原料の木は、ほとんどが輸入に頼っている。その輸入先の、例えば東南アジアや南米のある山間の集落を想い描いてみる。かつては密生していた山林が、日本の商社などによって伐採されて禿げ山になっている。そこに激しい豪雨が降り注ぎ、麓の集落を土砂崩れや鉄砲水が襲う。集落の人びとの暮らしが破壊され、犠牲者が出る。木を伐採しなければ、犠牲者は出ず、被害も少しは防げたかもしれないのに……。

これは、現実である。おそらく、今もそうは変わっていない。わたしたちが、出版文化を謳歌している、まさにそのことによって人が死んでいるという厳然たる事実。一度、その事実を知ってしまうと、そこから目をそらすことはできない。

一枚の紙 (一葉) には、そのことによって日常を壊され、予期せぬ死に追いやられた人びとの無念がからみついている。それを決して忘れてはいけない。一葉にしみついているその無念の思いを忘れないうために、その無念の思いを背負って後ろめたさとともに本づくりをしていくために、「一葉社」という名前を付けた。

ちなみに、社名の由来を聞かれると、「いちおう会社」なので、イチヨウシャ (一葉社) とよく答えている。「いちおう会社」と自虐的に謙遜しているように聞こえるかもしれないが、実は本気だ。「いちおう会社」こそが、わたしの望むところだからだ。

会社と個は、たぶん並立できない。すべての組織はそうかもしれないが、特に営利を主目的とする「会社」は、個に対しての抑圧装置である場合が多い。わたしは「会社」なんかよりも、個をすべてにおいて優先したい。

それなのに、そのような個の抑圧装置の代表であるような「会社」を自ら設立し、営む矛盾。いくらこの資本主義社会で出版業を始め、続けていくための便宜上とはいえ、これもかなり後ろめたい行為である。そこで、会社とはいえ、普通の (個を抑圧する) 会社ではなく、「イチヨウシャ」という名のおお「いちおう会社」です、と言って常に自分を戒めているのだ。

こんな後ろめたさを持ちながら、それではなぜ出版にしがみついているのか。そこまで後ろめたいならば、出版なんてやめてしまえばいい。何度、そう思ったことか。いや、今でも何かにつけてその思いに駆られる。

思いに駆られるごとに、サルトルのあの言葉「文学は飢えた子どもの前で有効か否か」が頭をよぎる。飢えた子どもの前で文学がなんの役に立つ。飢えた子どもの前では、文学よりパン、それが当たり前だ。でも、世界中のすべての飢えた

子どもたちにいつでもパンを与えることはできない。空間的にも時間的にも不可能だ。何よりも、パンを配り続けたからといって、飢えた子を生み出す社会のシステム、世界の構造を変えることはできない。

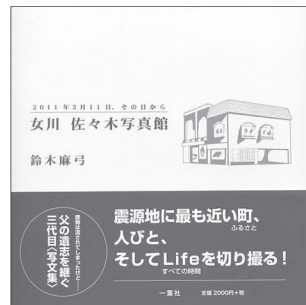
ならば、飢えた子どもたちを生み出さない社会、世界を作ればいい。そのために、文学は、もしかしたら有効ではないのか。

なぜならば、社会も世界も、結局は個一人ひとりで成り立っている。文学は、その個の心性に対して、一人ひとりの精神のようなものに対して有効な働きかけをするのではないのか。その文学の働きかけで、個一人ひとりが

が変われば、飢えた子を生み出さなくなると願えば、社会は、世界は変わるのではないのか。文学は飢えた子どもの前で有効になるのではないのか。——あまりに理想的で楽観的かもしれないが、でもこの思いを捨て切れない。文学には、確かにそのような働きがあるのでは、と。

「文学」を「本」に置き換える。本も、飢えた子どもの前で有効になる可能性がある。個一人ひとりの心性や精神に対して真に働きかけるような本であれば、その本で個一人ひとりが変わり、ひいては飢えた子を生み出さない社会に、世界に変わり得るのではないのか。本もまた、飢えた子どもの前で十分に有効になるのではないのか、と。そのような本であれば、「無念の集落の人びと」に対しても、後ろめたいながらも多少の顔向けができるかもしれない。なんとかして、飢えた子どもの前で有効であるような本を作りたい、そのような本にかかわりたい。その虚仮の一念が、後ろめたさにとりつかれながらも、いまだに出版にしがみつかせているのである。

そして、あっという間に25年が経った。



25年目の昨年は、大災害が襲った。その大災害が起きる前、一葉社の本が25年間で初めて賞の対象になった。『富士産婦人科病院事件——私たちの30年のたたかい』（富士産婦人科病院被害者同盟・原告団編）が、「山川菊栄賞（通称）特別賞」に選ばれたのだ。

この本づくりに携わっている間中、わたしの中から消えなかった一人の死者がいる。彼女は、被害者の一人で、この本づくりの前に自殺した。被害者同盟の方の話では、終電近くに地下鉄のホームに飛び降り、トンネルの中に入って行って側溝に身を潜め機をうかがっていたが、そのときは終電にも飛び込まず、結局早朝に電車で飛び込んだという。彼女の、その暗闇の中の朝までの時間を想うと、たまらなくなる。これが、もし地下ではなく地上にいて、朝になれば光が射すことを体で味わっていたならば、どうだったのか。

この本は、二人目の彼女を二度と生み出さないためにも、光り射す朝を迎える本にしたい、と念じた。暗闇にたたずむ彼女の前でも有効な本。その念（おも）いだけで本づくりに携わり続けたと言っても過言ではない。具体的には、あなたは決して独りではない、必ず仲間がいる、他者が手を差し伸べる、ということが形に表れるような編集に心を砕いた。

賞をいただいたことは嬉しいが、はたして光り射す本になり得ているか。不安は消えないままである。

そして、あの大災害。わたしの生まれ故郷、宮城県女川町が壊滅的な被害を受けたこともあろうが、そのとき襲ってきたのは覚束ない不安と喪失感だけで、本に関しては全く意識にも上らなかった。こんなときに本づくりをしている場合か、というでもない。ただ真っ白だった。そのことに気づいて、愕然とした。なん

だかんだ言っても、わたしにとって本はその程度のものであったのか。

しかし、本はもともとその程度のものなのだ。その程度のものであるから、その程度のものだと自覚して、いわば分をわきまえて本づくりに携わるべきなのだ。本づくりにつきまとう後ろめたさの、漠としていたもうひとつの面を再認識させられた思いだった。

やがて、このようなときだからこそ、今回の大災害に関する、分をわきまえた本を作りたいと願うようになった。悲惨さに乗じない、ことさら不幸を売り物にしない、そして集合体ではなくあくまでも個に寄り添う、できる限り私的な本を、と。そのようなとき、ネットで鈴木麻弓さんを知り、彼女のブログを読み写真を見て連絡を取った。そうして出来上がったのが、写文集『女川佐々木写真館——2011年3月11日、その日から』である。

彼女は、この本を出すために、最もこたえる両親の喪失を、正面から向き合っただけで追体験した。しかも、その苛酷さを引き受けながらも、そこからこの大災害を等身大で伝えて記録し、普遍性を持たせるためにはどうすればいいかを真摯に考え抜いた。彼女の文章や写真の力、勁（つよ）さが、それを物語っている。

『女川佐々木写真館』は、広がりを持つ受け止められている。

最後に、現在進行中の本を紹介させていただく。それは、東京新聞特別報道部編著の『原発、追跡——2011.3.11フクシマの必然』（仮）という本である。副題にある「必然」とは、フクシマの原発事故に至った必然性と、その事故によって必然的に襲いかかってきた放射能汚染をはじめとするもろもろの深刻な問題、つまりは原発事故の原因と結果の必然を指している。

東京新聞の「こちら特報部」の原発記

事には当初から注目し、その反原発の揺るがない姿勢・視点と、現象面はもちろん事の深層までが浮かび上がる取材事実に圧倒されていた。そのため、これらの記事を東京新聞の読者以外にも読んでもらいたい、と同時に脱原発の世を見据えて、この未曾有の事態のリアルタイムの記録としても本の形で残しておきたい、と考えて出版を打診したものである。

実際、特報部の一連の記事を読むと、原発事故がいかに文化全般を取り返しのつかないまでに破壊するかを痛感する。文化とは、一人ひとりの暮らし、息遣い、そしてかけがえのない時間だ。やはり原発は人間とは相容れない。取材を積み重ねたこれらの記事をまとめて読むことで、原発と私たちの生活・生存がもはや並び立たないという厳然たる事実を、説得力とリアリティをもって突きつけられる。

昨年の原発事故以来、今年の3月31日まで1年以上にわたっての原発記事をまとめたこの本は、世界的にもまれて貴重なドキュメントと信じている。

\*

実は、設立当初の25年前も、この『アクセス』に拙文を書かせていただいた。『月刊活字から』を創刊する意気込みを語ったものである。今読んでみると、そこからほとんど進んでいないことに気づく。いや、むしろ退行しているのかもしれない。しかし、あえて言うならば、この25年間は後ろめたさをより自覚して、後ろ向きに歩み続けたことに意味があったのではないかとも思っている。

この後ろめたさをかかえながら、「集落の人の無念」を忘れず、あくまでも個の側に立って、分をわきまえ、飢えた子どもの前でも有効足り得るよう念じつつ、いちおう会社の一葉社で本作りを続けていきたいと願っている。

（わだ ていじ／一葉社代表）

## 新刊ダイジェスト

※価格は総額（税込）表示です。

『震災と仏教界 東日本大震災報道1年 一週刊佛教タイムス・ダイジェスト』 ●佛教タイムス編集部編



東日本大震災の被災地に立地する寺院が地域住民の緊急避難場所、あるいはボランティア活動の拠点となったことは余り知られていないのではなかろうか。本書は震災直後から本年2月までに、専門紙「週刊佛教タイムス」の記者たちの懸命の取材によって掲載された関係記事と記録写真をダイジェストしたもので、佛教界が何を考え、どのように行動してきたかをよく伝えている。宗教

としての慰霊や供養もさることながら、前述の事柄や被災者のその後の心のケアに果たす役割は大きい。さらに、「宗教は、大震災に何をやるのか?!」や「原発事故が問う未来と宗教」等を連載し、宗教者として自らの責任を問い直している。

◆1050円・A4判・80頁・佛教タイムス社・東京・2012/3刊・ISBN978-4-938333-04-1

# 売行良好書

期間：2012年3月16日～4月15日

【出荷センター扱い】※税込み価格

- (1)『未来ちゃん』2100円・ナナロク社 (2)『あした会えるさ』1000円・茨城新聞社 (3)『これから昔話を語る人へ 語り手入門』1680円・小澤昔ばなし研究所 (4)『なせば成る!』840円・山形大学出版会 (5)『私たちの選んだ子どもの本 改訂新版』1050円・東京子ども図書館 (6)『女川 佐々木写真集』2100円・一葉社 (7)『絵本図書館 新装版』2415円・ブックグローブ社 (8)『全訳 遠野物語』1680円・無明舎出版 (9)『世界でいちばんやさしい料理教室』1365円・ベターホーム出版局 (10)『絵本の庭へ』3780円・東京子ども図書館 (11)『医者現場でどう考えるか』2940円・石風社 (12)『復元 啄木新歌集』1050円・桜出版 (13)『小出裕章 原発と憲法9条』1470円・遊絲社



【三省堂書店神保町本店4F—センター扱い図書】※税込み価格

- (1)『東京かわら版 4月号』630円・東京かわら版 (2)『フリースタイル 18』932円・フリースタイル (3)『東京の片隅からみた近代日本』2100円・弦書房 (4)『思考のリフォーム』1365円・冬弓舎 (5)『hp paper 001』500円・HB (6)『未来ちゃん』2100円・ナナロク社 (7)『新島八重の生涯』1680円・歴史春秋社 (8)『越後村上氏二代』2100円・歴研 (9)『円周率100万桁表』330円・暗黒通信団 (10)『温泉番長ほっかいどう book1』780円・海狗舎

【ジュンク堂書店池袋店地方出版社の本—センター扱い図書】※税込価格

- (1)『証言 奪われた故郷』700円・オフィスEMU (2)『ぐるっと埼玉サイクリングルート100』1300円・幹書房 (3)『日光パーフェクトガイド 改訂新版』1575円・下野新聞社 (4)『あした会えるさ』1000円・茨城新聞社 (5)『新島八重の生涯』1680円・歴史春秋社 (6)『高尾山・景信山・陣馬山登山詳細図』735円・吉備人出版 (7)『全訳 遠野物語』1680円・無明舎出版 (8)『東京の片隅からみた近代日本』2100円・弦書房 (9)『富山地理紀行』2310円・桂書房 (10)『殺処分ゼロの理由』1050円・熊本日日新聞社

以下ホームページでも各種情報提供を行っております。ご利用ください。  
本と出版流通のページ：<http://neil.chips.jp/>


## トピックス — ★★

▼3月16日未明に87歳で亡くなった吉本隆明さんの著書は、当センターでも数多く扱ってきました。物議を醸した『**反核 異論**』（深夜叢書社刊 1682円）や自由価格本という試みで話題となった『**学校・宗教・家族の病理**』（同社刊・品切）、そして『**マルクス 読みかえの方法**』（同社刊・品切）や『**世界認識の臨界へ**』（同社刊 2854円）等々。／弓立社の宮下和夫氏のプロジェクトである「**吉本隆明全講演CD化計画**」で20巻ほど刊行されたCD・DVD・VHSビデオも当センターで取り扱いました。／また吉本さんの年譜・書誌作成で知られる川上春雄さんが主催していた試行出版部では『**試行**』の復刻版や『**吉本隆明新詩集**』『**カール・マルクス**』『**初期ノート増補版**』等が刊行されていました。どれも品切となって久しく、2001年に川上さんが亡くなったこともあって、試行出版部も活動を停止しています。川上春雄さんとの関連でいうと、黎明舎発行・茜屋書店発売『**銀河系通信第十九号**』（5250円 2006年8月刊）には川上さんの追悼特集があり、『**思想詩人・吉本隆明のこと - 試行**』三十六年と史観の拡張』という川上さんのエッセイと『川上春雄さんを悼む』という吉本さんの追悼文を読むことができます。／こちらは直販のみとなりますが、松岡祥男氏主催の猫々堂刊『**吉本隆明資料集**』は現在も刊行中です。最新は114。

## 郵便販売のご注文方法

- ◎お名前、お届け先（郵便番号、住所）、連絡先お電話番号、ご注文品の書誌名、冊数の必要事項を明記のうえ、下記までFAXでご連絡ください。
  - ◎送料は、冊子小包・メール便共実費でお送りさせていただきます。基本的にメール便は、一冊210円でお送り致します。（メール便の到着は、発送してから3～4日かかります。）お急ぎの方、その他ご要望がございました場合はお気軽に下記までお問い合わせ下さいませ。
  - ◎なお書籍お買上総計（税抜き価格）が5,000円以上の場合は、送料をサービスさせていただきます。
- ★地方・小出版流通センター  
FAX：03-3235-6182

地方・小出版物のデータになります。綴じて保存してください。



# 三省堂書店

BOOKS SANSEIDO

**神保町本店 4階**  
**地方出版・小出版物フロア**

営業時間 10:00 AM～8:00 PM  
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-1  
TEL. 03-3233-3312(代)  
URL. <http://www.books-sanseido.co.jp>

営業の  
ごあんない

本店4階売場では、地方・小出版流通センター扱いの新刊全点のほか、地域別に書籍を取り揃えております。また、地域ならではのタウン誌、趣味の雑誌も扱っております。

